

以森伝心

No. 40

理事長 柏原康夫筆

京都の森を守り育てる運動に参加しませんか

巻頭特集

木に宿る仏を形にし、 新たな生命を

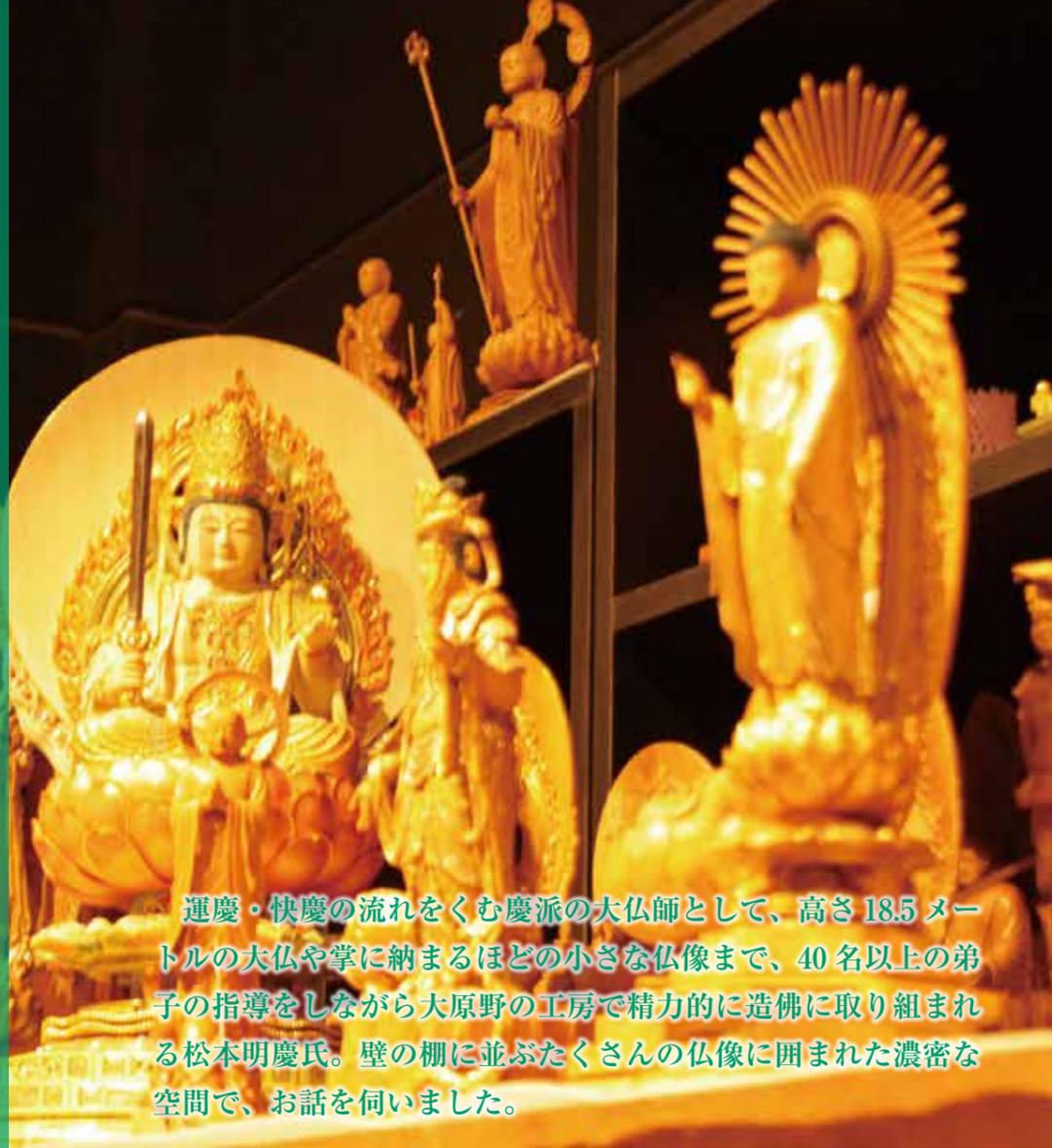
——大佛師 松本 明慶 氏



特集2 インタビュー
森林の利用を考える
—関西初の
大型商業木造ビル
SU・BA・CO
株式会社リヴ

■京都の森の仲間たち
天王山森林保全ボランティア活動
美山緑の少年団

木に宿る仏を形にし、 新たな生命を



運慶・快慶の流れをくむ慶派の大仏師として、高さ18.5メートルの大仏や掌に納まるほどの小さな仏像まで、40名以上の弟子の指導をしながら大原野の工房で精力的に造佛に取り組まれる松本明慶氏。壁の棚に並ぶたくさんの仏像に囲まれた濃密な空間で、お話を伺いました。

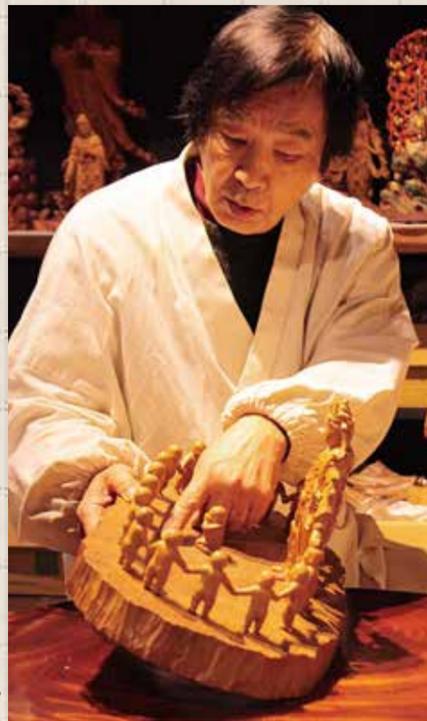
良木との出会いは衝撃的です

使う木は木材市場で買ったり、大きな木が伐られると連絡が入ったりして、全国から集まってくるんです。「この木にはこれを彫りたい」というのが自然と思ひ浮かびますね。大きな木はそれ自体が祈りの対象です。例えば縄文杉などは皆「見てみたい」と思うでしょう？

集まってきた木は何年も寝かせておいてから彫ります。木は伐った後も温度湿度で膨らんだり縮んだりするため、落ち着くまで置いておきます。湿度が上がってくると木はじわじわ膨らみ、乾くと縮んで割れてしまいますので、作品を彫る時にはそのあたりも計算しないといけません。ほら、これ。(写真右) 皆普通こういう仕事はしたがりません。まずこんな細い隙間には刃を入れにくい。それに木が動くと、繋がっている細い部分はそのままだと割れてしまう。でも子どもの足元にほんの少し「遊び」を作ることによって、木が縮むと少し爪先立ちをするような形になり、割れな

くなり、子どもらしい動きを付けることもできる。光の当たり方によっても表情が変わります。感情や時間の経過も感じられるように作ってあるのです。

子安観音菩薩像を見ながら



「気」配りは「木」配り

同じ造形でも「彫刻」と「彫塑」は違います。彫塑は盛り付けるのでいくらでも大きくできますが、彫刻は元の木より大きくはできません。彫る時に出る木端も捨てずに取っておき、適材適所に使います。薪になる木、お箸に向いている木、お椀にしやすい木、彫刻する木といろいろです。

日本の文化は言わば「木の文化」。昔はなんでも木でできていましたね。木が由来の言葉もたくさんあります。「気を配る」というのは木を適材適所に生かして使う、「木を配る」ことに通じます。何気なく使われる「根回し」も木を移植する作業から出た言葉です。

適材適所は人間も同じ。優れた軍師は適材適所に人を配る。会社でも同じですね。仏師も同じで適材適所

に木や人を配置する、ということです。

長く生きてきた木にはそれだけの価値があります。300年、500年と生きたということは、伐られてからも300年、500年以上生き続けるということです。今後はそうした木を、日本の文化を守るためにも、枯渇することなく、国策として保護育成されることをお願いしたいと思っています。



作業中の明慶氏

取材後記



木から取り出された命たち

私たちを出迎えてくれたたくさんの仏像や小指の爪の先ほどの小さな蛙、十二支たちはどれも「彫られた」のではなく、木から「取り出された」ように思えてならない。インタビューの後、木材置場と大きな像を彫るための作業場も見せていただいた。不動明王の仏像の背後に立つ「光背」を彫る作業を始めるところだそうで、幾重にも引かれた下描きの線に「ここはこっちが正しい線で、このあたりは面白くないのでもう少しやり直したい。彫り始めてからではやり直せない。どの線が正しいかはもう私にしかわかりません」。仏を取り出すための葛藤や喜びを垣間見た気がした。たくさんストックされた木材も工房のそばに置いてあるのはほんの一部。木の中に宿る仏様が、取り出される時を今か今かと待っておられるようだった。



(聞き手、文：協会広報ボランティア 山田 明子 (三洋化成工業株式会社))

お話を伺った方



松本 明慶氏

19歳で運慶の流れをくむ慶派の佛師野崎宗慶に弟子入り
昭和55年京都仏像彫刻展で京都市長賞 (以後10回受賞)
昭和60年同京都府知事賞受賞 (以後13回受賞)
平成3年大仏師の号を受ける
平成23年京都府文化賞功労賞受賞
平成24年京都府林業大学校特別教授就任
平成25年京都市文化功労賞受賞
平成26年京都新聞社文化学術賞受賞
平成27年和歌山県文化功労賞受賞
今日までに19の大仏を全国各地に納める

株式会社リヴ

向日市に建てられた大型商業ビル。すっきりしたデザインの外見からはわからないが、実は木造建築。今関係者の中で注目を集める関西初の大型商業木造ビルを建設した株式会社リヴにお話を伺った。



森林の利用を考える 関西初の大型商業木造ビル SU・BA・CO

地域の木材でビルをつくる

このビルは5階建てで、1階は鉄筋コンクリートですが2階から上は木造です。ツーバイフォー工法を用い、内装は京都府内産木材、柱などは国産木材を使用しています。当社ではこのビルが1棟目ですが、既に着工したのも含め現在4棟目まで施工が決まっています。これらは全て民間からの受注です。発注される側としては、環境にやさしいことを意識してか、CSR（企業の社会的責任）の視点などを意識されているようです。

当社では以前から、社会的な活動として「NPO 法人京都暮らし方研究会」で木材の地産地消などを考える取り組みを行ってきました。私たち自身が本社ビルを建てる際にも何かできないかと考えていたところ、木造大型ビルの話聞き、これまでの経験から「自分たちでもできる」と考え、やってみることにしました。この「SUBACO」プロジェクトもいろいろなメディアにご紹介いただきましたが、建築中の2棟目のビルも、この春構造体見学会を開催したところ、行政の方が見学に来られたり新聞にも取り上げられました。



建築中のSU・BA・COビル。実際に木材が使われていることがわかる

「木造で大型ビルはできない」という誤解



明るいビルのオープンスペースエリア。地域のNPOなどが利用している

大型の木造建築という強度や寿命を心配される方がおられますが、東寺の五重塔や清水寺など、大きくて古い建物が今も立派に建っているのは皆さんもご存知のはずです。最近、新国立競技場で木材の利用が注目されたこともあり、耐火性能に関する国の基準

なども整備されてきました。コンクリートは年数がたつと中性化し、強度が下がってくるのですが、木は数十年から100年後にピークが来るまで、どんどん強度が上がっていくという性質があります。また、木造建築の方が建設までに使われるエネルギーがトータルで少なく、さらに木材自体が空気中の二酸化炭素を固定化するという働きを持っていますから、木材を建物の構造材として長期間使う方が環境によいのです。

建築中の2棟目の現場には、ツーバイフォー工法の本場である北米からも視察に来られました。アジアの建築関係者からも、防火や耐震基準が厳しい日本で認められた工法なら自国でもすぐ対応可能だと大変な関心をいただいています。

コスト的にも、サッシなど比較的低コストの住宅用資材が使えるのがメリットです。また、木造であることから、ゼネコンではなく地域の工務店の職人さんをお願いできるので、地域経済への貢献にもなると考えています。

「地元の木を選ぶ」ことがより身近な選択になれば

使用する京都府内産木材は、やりとりのある材木屋から直接仕入れています。しかし、今後もっと木造建築が増えれば、京都にはJAS認定工場が少ないなどの課題もあり、今以上に必要な時に供給できる仕組

みがあればと思います。他府県では国産材の価格が外材と差が少なくなっていますが、京都ではまだ正直行政の補助がないと選びにくい状況です。将来的には商業ベースだけでも回っていくようになれば理想的ですね。



森との関わりで言えば、木を大型の建物で構造材としてより多く使うことや、「ウッドマイレージ※」の考え方から近く地域産木材を使うことで、山で木を育てるところから利用するまでをつなげていくことに貢献できればと思っています。

※ウッドマイレージ…木材の量（材積）と輸送距離、輸送手段の係数を掛け合わせることで算出される、木材の輸送過程で排出される二酸化炭素量を示す指標

一まちの拠点から木づかいの意義を発信

このビルは1階に子育て支援のNPOがあるほか、カフェコーナーは地域の方に開放しています。2階が当社の本社、3、4階がテナントや若手起業家のシェアオフィスで、バーベキューなどに使用可能な屋上スペースも誰でも利用できるようにしています。この建物が社会的な役割を担えるようにするとともに、地域ぐるみのまちづくり活動への参加なども積極的に行っています。

多くの人が関わる建物を通じて、地域産木材を使うことの社会的な意味を、より多くの人に知っていただければと願っています。

お話を伺った方



株式会社リヴ（写真は波夢野さん）
波夢野賢さん・市川宣広さん

（聞き手、文：協会広報ボランティア 井上 和彦）



スタートから9年、23回を迎える 天王山森林保全ボランティア活動 (大山崎町)



11月11日(土)、“天下分け目の天王山”で始まったKDDI株式会社恒例の「天王山森林保全ボランティア活動」は、幼稚園児から60代の熟年層までさまざまな世代76人が参加。平成9年から毎年春と秋、今年で23回目を迎える活動にお邪魔しました。

まずは山への感謝から

この日の活動は①薪づくり②カブトムシの森づくり支援、植樹木(クスノキ)の保全作業(竹串つくりと設置)③竹のチップ処理④しいたけ菌の4メニュー。薪づく



左/機械操作の二人の女性は息もぴったり
右/男性顔負け、薪を量産する女性陣



下/竹チップづくり

りは、平均直径90cm、高さ30mの樹齢約100年というシイの丸太割りから。丸太はあらかじめ40～50cmにカットされているものの、目が詰んでおり、かなりの力とコツが必要。機械と手斧の二通りで始まった作業も、30分ほど経つと、女性も積極的に参加しはじめ、薪がどんどん作られていきました。

子供たちも大活躍

薪づくり場から少し離れた山中では何やら轟音が。なんと、葉付きのままの大竹が吸い込まれるように機械に入ったかと思うと、シャワーのように竹チップが勢いよく吹き出されてきました。樹木粉碎機からスピーディに作り出される竹チップの山は、カブトムシの幼虫生育に役立ったり、畑の肥料として活用されるとか。

チップづくりのそばでは、子供や女性が竹を細割りしたり切りそろえたり。いずれも孟宗竹で、春には美味しいタケノコがワンサと採れ、春の活動は一段と活気があるそうです。



竹割り器に手慣れて幼児も一生懸命

——CSRに留まらない森づくりへ

しいたけづくりの植菌作業は、親子が中心で3回に分けて実施されました。20～30cmに小割りされた丸太に電気ドリルで深さ25mm程度の穴をあけ、種駒をハンマーで打ち込み、全部の穴がしいたけ菌で塞がれば完成です。各々、丸太に名前と日付を書いて、後は湿気のあるところで保存。しいたけにお目にかかるのは長いと3年後とのことでした。

この日の活動でできた150束ほどの薪束は、近隣の保育園や老人福祉センターにプレゼントされました。

京都では現在、40を超える企業が各地で「森林づくり活動」を行っています。その初期から活動する当社では、CSR活動に留まらず、今後も森のサイクルを大切にしながら、天王山を訪れる多くの人たちに喜んでもらえるような美しい里山づくりをめざしています。

(取材、文) 広報ボランティア 山本 忍 (正会員)

峠を越えたふるさとの歴史を学ぶ 美山緑の少年団 (南丹市)



美山緑の少年団は、小学校の統合に合わせて2年前に再結成され(以森伝心39号にも掲載)現在は36名の団員と14名の指導者で活動中です。晴天に恵まれた11月5日(日)、美山緑の少年団29名が郷土の歴史に触れる体験に参加し、その活動取材しました。

——郷土の交流を知る

美山と鏡峠を越えた同市内の日吉町畑郷地区とは、かつては峠を越えて日常的に交流がありました。美山から



日吉へ人々が入植した歴史があり、血縁的にも親戚が多く、JR山陰線の開通前は畑郷からは日吉町内よりも美山に出る方が生活上の利便性もあったようです。しかし鉄道の開通に伴い日吉や胡麻へと人の流れが変わり、生活路としての鏡峠越えは次第に忘れられるようになりました。

そこで、15年ほど前から両地区の有志の方々が鏡峠越えの交流を再開。古くからの繋がりを次世代に残そうと、峠を越えた交流を続けてきました。その活動が節目を迎える今回、美山緑の少年団がこの交流に初参加することとなりました。

——峠を歩いて知るふるさとの歴史

当日は、京都府立大学の演習林事務所まで車で移動し、山道に入りました。道は有志の方々の手で歩きやすく整備されています。途中振り返ると、はるか眼下に廃校になった鶴ヶ岡小が見えたり、鏡峠の由来となった『鏡石』についてのお話を聞かせてもらいながら、2時間ほどで峠の頂

上に到着。そこで日吉側から登ってきた畑郷の皆さんと合流しました。お弁当を食べた後は参加者全員でビンゴゲームなどをして盛り上がりました。



——地域の「生き字引」のお話を聞く

交流終了後は、畑郷側に下山、集落にある玉応寺でご住職の細川俊彦さんから両地区の交流の歴史や『長瀬の大蛇伝説』など興味深いお話を伺いました。何代か遡れば双方の集落の全員が親類関係にあるというお話はとても印象的でした。子どもたちも子どもたちなりの解釈で自分たちのルーツについて考える機会を持てた、貴重な体験になったのではないのでしょうか。



一つ残念なのは畑郷の集落に子どもの姿がないという現状でした。現時点で地区には子どもがいなく小学校もないとのこと。この自然に囲まれた環境をなんとか次代に伝えていければと切に思いました。

——充実した少年団での体験を糧に成長を

緑の少年団の活動としては、素晴らしい指導者と豊かな周囲の自然環境に恵まれた幸せな子どもたちなどと、一日活動を共にしてうらやましく思いました。指導者の皆さんをはじめ関係者の皆様方の団活動に対する情熱とご努力に頭が下がる思いです。小学校卒業と同時に団を去る児童もいるようですが、卒団後もこれらの体験を大切に先に進んでくれることを願うばかりです。

(取材、文) 広報ボランティア 森 稔 (正会員)

団体プロフィール

設立：平成28年5月結団
会員数：団員36名、指導者14名
同市内で活動されていた大野緑の少年団、鶴ヶ岡緑の少年団の2団が統合して結成



平成29年12月19日 京都市上京区

㈱SCREENホールディングス 「森林の利用保全に関する協定」調印式

京都で創業し、CSR経営の推進に努める株式会社 SCREEN ホールディングスが、環境保全分野の社会貢献活動の一環として、京都モデルフォレスト運動に参画することとなり、府庁において調印式が行われました。今後は、亀岡市宮前町内の森林をフィールドとして活動を進められます。



平成29年12月3日 京都市伏見区

「企業・NPOと学校が連携した森林ESDフォーラム in 京都」開催

京都教育大学附属図書館の主催で、教育と地域の森林・林業の現場を繋ぐ、森林・林業に関連する内容が記述された教科書や副読本を展示する「教科書展」とあわせ、これからの企業・NPO等の地域と学校が連携した森林ESDのあり方を議論するフォーラムが開催されました。当協会からも「森の出前授業」などの事例報告を行いました。



平成29年12月1日

「京の木の名刺」の取り扱い開始

木材利用のPRの一環として、京都発の北山丸太を活用した商品などを取り扱う協会賛助会員である㈱ KyotoNatural Factoryと連携し、売り上げの一定額が京都の森を守る取り組みにあてられる「京の木の名刺」の取り扱いを開始しました。詳しくは同社075-253-0699まで



平成29年12月2日 福知山市・綾部市内

「林業の現場見学とヒノキのマグカップづくりワークショップ」開催

京都市内の小学生や福知山市内の緑の少年団など総勢52名が参加。伐採の現場では、講師伊東和哉さんのお話を伺った後、実際にチェーンソーでの伐採を見せていただきました。終了後は綾部市内の「里山ねっと・あやべ」に場所を移し、マグカップづくりで木の風合いを楽しみました。



●ご支援・ご協力有難うございました ※平成29年中に10万円以上のご寄付をいただいた企業、団体五十音順／敬称略

一般寄付：KDDIまとめてオフィス関西㈱

緑の募金：大阪ガス㈱、海上自衛隊舞鶴地方総監部、京都中央信用金庫、京都府ホンダ会、京都北都信用金庫、ダイドードリンコ㈱、ブックオフ久世橋店 堀川五条店 大久保店 亀岡店

—当法人への寄付には税法上の優遇措置が受けられません—

当協会は寄附優遇の対象となる特定公益増進法人です。また平成28年3月24日には、租税特別措置法施行令第26条の28の2第1項に規定する要件を満たすとして京都府知事から税額控除に係る証明を受けました。

・個人…特定寄付金として一定金額まで寄付金控除が認められます。

・法人…一般の寄付金の損金算入限度額とは別に別枠の損金算入限度額が設けられています。

(個人/所得税の例)当協会に対して2,000円を超える寄付をされたときは、所得税の確定申告を行うことにより、寄付金控除として(寄付金額-2,000円)×40%が税額から控除されます。

※優遇措置の詳細は、所得税については税務署へ、個人住民税についてはお住まいの市町村へお問い合わせください。



発行：公益社団法人京都モデルフォレスト協会
〒604-8424 京都市中京区西ノ京樋ノ口町123 京都府林業会館3階

TEL&FAX 075-823-0170 E-mail kyomori@kyoto-modelforest.jp

URL <http://www.kyoto-modelforest.jp>

2018年冬発行

facebook <https://www.facebook.com/KyotoModelForest>

入会案内資料をご希望の方は
ご連絡ください。

